

# I 章 総 論

## 1. 緑化マニュアルの作成目的と適用範囲

### 1) マニュアルの目的

県における第6次鳥取県総合計画の主要課題の一つである全県公園化構想を始め、「緑」に関する種々の構想・計画にそった「快適で潤いのある環境」の創出に向け、質の高い緑づくりを進めることを目的とするものである。緑化する場所や目的、期待する機能、環境条件に応じた計画と適切な施工、着実なる緑の育成を目指した管理等の重要性を認識し、緑化事業を進める技術的な手引きとして「公共施設緑化マニュアル」を作成したものである。

### 2) 適用範囲

本マニュアルは、公共施設における緑化事業を主な対象としたものであり、新規施設はもとより既存施設においての緑化計画、施工、管理を行う場合の手引きとなるよう作成している。

高木、中木、低木、地被類等の植栽に限定し、法面植生（種子吹付等）に関するものについては、共通事項、留意事項のみを盛り込むこととする。

### 3) マニュアルの活用

公共施設の緑化事業を進めるに当たっては、このマニュアルを積極的に活用し、事業に反映させるとともに、地域住民の公共事業への理解を深めることも期待する。

## 2. 緑化事業の特徴

緑化事業の最大の特徴は、植物という生物的素材(生きもの)を対象としていることであり、事業実施にあたっては、常に次のことに留意する必要がある。

- ・植物は、常に生長しており、緑化には施工完成時の姿とともに長期的視野が必要である。
- ・植物は、生物的環境要求があり、種類毎に独自の要求を持つとともに同一種類においても固体毎に偏差がある。
- ・植物は、形態的にも景観的にも持前の性質を持っているので、それぞれを最大限に生かすことにより緑化事業の機能を発揮する。
- ・植物は、植栽後の管理が大切で、植付完了が緑化の始まりと言える。

## 3. 緑化事業の手順

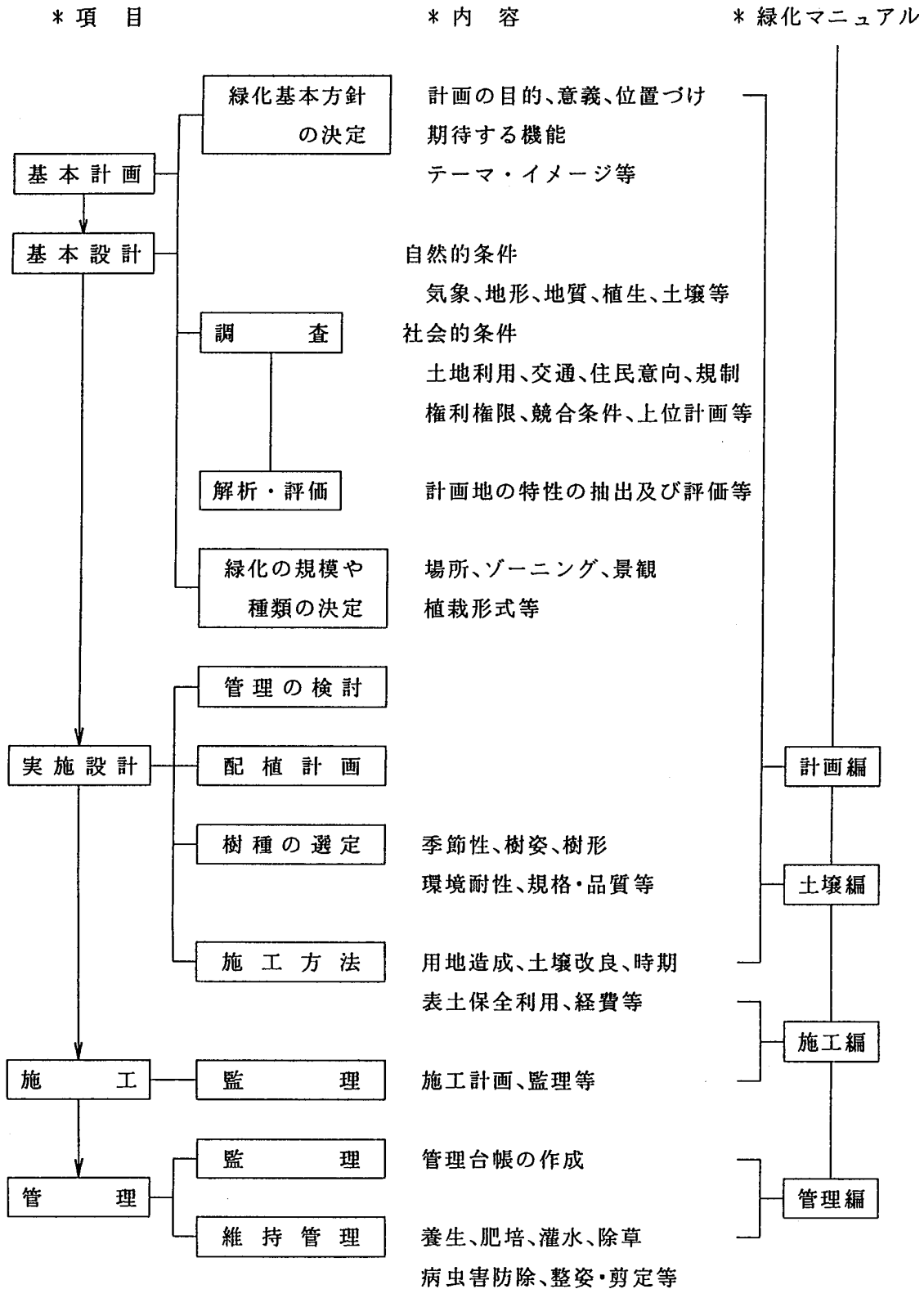
緑化事業は基本構想を基に、計画・設計を行い、施工・管理を経て完成となる。これ

### 植 物 雑 学

古来から人々は、植物とのかかわりを深く持ってきた。ページ下段のこれからの文章は、植物に関する諸々の文献からとったものであり、事柄によっては、うらはらのところもたたあるが、興味ある読者の雑学的一端にでもなれば幸いである。まず、鳥取県の代表である大山、砂丘に関する文献からの始まり、始まり……。

に対するフローと本マニュアルとの対応は、下記の通りである。

1) 緑化事業の手順とマニュアルとの対応



## 2) 計 画

- ① 緑化事業の計画に当たっては、目的・意義づけを行って、基本方針・基本構想を立案する。
- ② 基本方針に添って、計画地周辺の土地利用の状況や交通条件、住民の意向等の地域特性や社会的条件の調査を実施する。
- ③ 気象条件や土壌、地形等の自然的条件及び周辺の景観及び植生等周辺環境調査を実施する。
- ④ ②及び③の基礎的な調査を基に、計画地の特性の抽出及び評価等を行う。
- ⑤ 計画地の特性の抽出及び評価、地形、規模等を基に緑化事業の基本方針の再検討及び基本的なゾーニング等、基本計画を作成する。
  - ・緑化の目的や緑化による機能の発揮、環境条件に適応した計画とする。
  - ・地域特色の演出や快適な景観形成に配慮した計画とする。
  - ・緑化の規模や植栽形式、基本的なゾーニング等を緑化完成段階を考慮して設定する。
- ⑥ 基本計画に基づき基本設計、実施設計を策定する。
  - ・植栽後の維持管理の程度や周辺環境との調和等を考慮して、施工完成時の段階に対応した計画を立てる。
  - ・計画の意図が十分発揮でき、緑化目的が達成できる配植計画を策定する。
  - ・樹種及び樹木規格等の決定にあたっては、緑化の目的や完成段階等を考慮して決定する。
  - ・植栽地の造成計画では、表土の保全、活用等に配慮するとともに、土壌調査をもとにした土壌改良及び施肥(基肥)の計画、排水計画等の生育阻害要因対策計画を立てる。
  - ・植栽に適した時期に配慮した施工計画を提案する。

## 3) 施 工

- ① 緑化計画の意図等を十分踏まえ、適正な施工を行う。
- ② 計画段階で想定されていない生育阻害要因が発生した場合、その対策を行う。

## 4) 管 理

- ① 緑化目的の達成をはかるため、維持管理計画を策定する。
- ② 施工完成段階と緑化完成段階を考慮した維持管理計画を策定する。
- ③ 維持管理計画に沿った適正な管理を適期に行う。

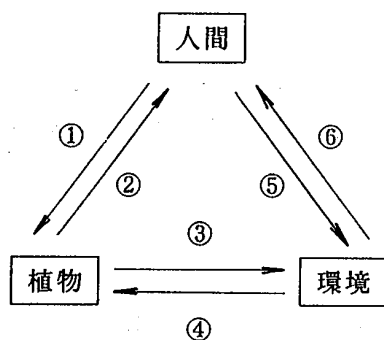
### ダイセンキャラボク

キャラボクの変種ともいわれる低木の針葉樹で、大山では、おもに主峰弥山の山頂部に8ヘクタールにおよぶ純林を形成しており、国の特別天然記念物に指示されていることは有名である。  
県の木。大山町の木。

#### 4. 緑化環境に関する調査

緑化計画の策定の基本となる、人間（社会）・植物（材料）・環境（土壌・気象等）の相互関係は、（図1-1）に示す通りであり、調査項目と調査内容及び植栽との関係は、（表1-1）に示す。

（図1-1） 植栽計画の三要件の相互関係



- ① 植栽の目的による材料の選定
- ② 材料の性質による目的の限定
- ③ 材料の性質による環境への要求
- ④ 環境の許容する材料の選定
- ⑤ 環境を人為的に改変する可能性
- ⑥ 環境による目的の選定と制約

（「樹木の設計」より抜粋）

##### 1) 計画案の作成

収集された資料をもとにして、計画案の作成を行う。

計画の作業は、計画を構成する三つの要件である人間、植物、環境の相互の関係から、規定する条件を検討して行われる。（図1-1）

緑化事業の手順によって、植栽の目的、機能、形態、場所、時間、経費などの計画の与件となる部分が最初に確定される。次に、この目的に応じた樹種、樹形、配植などが決定され、さらに、環境を人為的に改変するための植栽地盤造成、植栽工法、土壌保全施設、給排水施設などの施設が検討される。

これらの検討を経て、素案といくつかの代替案が作成される。

#### ブナ

大山のブナ林は、その面積からいって西日本随一といわれ、見事な原生林や四季をいろどる樹海の美しさは、学術的に価値が高く、近年は観光資源として大山の誇る重要な財産となっている。江府町の木。

(表1-1) 植栽環境に関する調査項目

	調査項目	調査内容	植栽との関係	
自 然 的 環 境	気 象	月平均気温・積算温度	樹種の選定(計画)	
		月最低気温・月最高気温	植栽時期・樹種(計画・施工・管理)	
		湿度・蒸散量	灌水施設(計画・設計)	
		年降水量	樹種の選定(計画) 灌水・排水施設(計画・設計)	
		月降水量	植栽時期(施工・管理)	
		日照時間	樹種の選定(計画) 照明施設(計画・設計)	
		風向・風力	防風施設(計画・設計)	
		降霜の初終日	植栽時期・防寒(施工・管理)	
		生物季節	樹種の選定(計画) 植栽時期(施工・管理)	
	地 形	傾斜・方位・標高 起伏量(乾地湿地・風当り・日当り)	樹種の選定(計画) 保全施設(計画・設計)	
境	地 質	地質断面・地質図	保全・排水施設(計画・設計)	
	土 壤	土壌断面 土壌図 物理的性質 化学的性質	樹種の選定(計画) 表土保全(計画・設計) 植栽工法(設計) 土壌改良(設計) 施肥(施工・管理)	
	水収支	地下水位・湧水	樹種の選定(計画) 排水施設(計画・設計)	
自 然 的 環 境	植 生	現存植生	樹木・樹林の保護(計画)	
		潜在自然植生	樹木の移植(計画・設計) 樹種の選定(計画)	
	動 物	哺乳類・鳥類・魚類・ 昆虫類の分布	種の保護(計画)	
			保護施設(計画・設計) 有害動物の駆除(管理)	
		特殊環境	潮 風 害	樹種の選定(計画) 防潮・防風施設(計画・設計)
			大気汚染	樹種の選定(計画)
境	水質汚濁	灌水施設(計画・設計) 排水施設(計画・設計)		
	土壌汚染	土壌改良(計画・設計)		
社 会 的 環 境	土地利用	土地利用現況 土地利用計画 利用施設の配置 土地所有	植栽計画全体と関係 (計画・施工・管理)	
	法的規制	法律・条例等の規制	植栽計画全体と関係 (同上)	

(「樹木の設計」より抜粋)

ナラ

大山では、コナラは比較的到低い山麓各地に幅広く分布し、高さによるミズナラとの限界は、標高600mから800mあたりである。

## 5. 植栽の基本

公共緑化を行う環境は、土壌条件の問題、生育限界の問題など厳しい条件下にある。このような悪条件の中で、樹木等の導入を図り、緑化目的を達成するためには、樹木の生活過程、性状を把握するとともに、植栽地の構造、植付け方、その後の養生管理に十分な注意を払わなければならない。

### 1) 植栽の機能と景観

人間の生活の場において緑はなぜ必要となるのか。

元来、緑化という概念は景観造成という面が大変強かったものと思われる。都市地域や施設の周辺において緑地が不足しているという認識が広がり、緑地に対する要求が次第に強くなっている。

その機能を大別すると（表1-2）の通りであるが、植栽の機能というものは元来、多目的なものであり、多くの場合、機能は重複している。

（表1-2）緑の機能的分類を中心とした緑化の目的・効果その対応施設

機能・目的		効果	対応施設・対応策
景観 形心 成理 及的 び機能	情操涵養	・郷土愛 ・都市づくり ・ふるさとづくり	・市民の森 ・鎮守の森 ・街路緑地 ・学校緑化
	美化 快適性	・町づくり(住み良い町) ・情緒 ・ランドマーク	・公園, 緑地 ・広場 ・工場緑化 ・住宅地の緑化 ・市民運動 { 緑化運動 街づくり運動 町内美化運動 花いっぱい運動
安全防 及災 び的 機能	公害防止 災害防止	・防音-騒音 ・防振動 ・防火 ・防風, 防潮 ・防水 ・交通安全	・道路緑化 ・工場緑化 ・住宅緑化 ・緩衝緑地 ・遮蔽 ・防風林 ・都市林 ・防潮林

### カエデ（その1）

大山で目にとまるカエデ類はざっと12種類で、それぞれ地形や気象条件によって分布、色あいに変化がみられ、大山はこれらのカエデが鑑賞できる絶好の場所といえる。

機能・目的		効果	対応施設・対応策
環境衛生的安全性機能	空気浄化 水の浄化 環境保全	・防煙 大気汚染 ・防臭 防塵 ・酸素の供給 ・気流の変化 水の浄化 ・保温 冷涼	・自然公園 森林公園 ・街路樹 ・緩衝緑地 ・公園, 緑地 都市林
保健的体育機能	スポーツレクリエーション	・保健 体育 ・休養 娯楽 ・緑陰	・公園, 緑地 ・都市林 広場 ・緑道 ・遊歩道 自転車道

## 2) 植栽の視覚的効果

植栽は法面の保護等の物理的な効果もあるが、一般的に、地上部の形態や組合せ等の視覚による効果が主であり、下記のものがある。

- ① 地盤のレベル変化点、勾配変化点を自然に見せるための植栽
- ② 空間相互の景観的關係づけのための植栽  
これには次のような場合が考えられる。
  - ・建造物とサインとの景観的關係づけ
  - ・建造物相互の景観的關係づけ
  - ・外部空間相互の景観的關係づけ(領域の構成)
- ③ 視線の誘導効果のための植栽
- ④ ランドマークの形成
- ⑤ 視線の遮断とスクリーン効果
- ⑥ 空間にスケール感を発生させる樹木

## 3) 土木事業と緑地形成手法

土木事業における緑化を進める場合、より多くの緑地(植栽地)を生み出す手段として、下記の点を着眼点とする。

- ① 既存緑地の保存
- ② 敷地の区割りの段階で積極的な新しい緑地の創造
- ③ 敷地内の空地, 空間の多目的利用
- ④ 事業により生じた残余空間の利用
- ⑤ 未利用地や施設建設予定地の利用

### カエデ(その2)

主要なものは次の通りである。

イタヤカエデ・ウリハダカエデ・ハウチワカエデ・コハウチワカエデ  
オオイタヤメイゲツ・コミネカエデ・イロハモミジ・オオモミジ・  
ウリカエデ



#### 4) 植栽の効果と注意点

公共緑化は、大規模な森林等における経済的な効果や、洪水の緩和、土砂流出防止等の大型の災害防止の機能までは期待できないが、法面の崩壊防止や、飛砂の防備・防風等の災害防止機能、大気の清浄効果、防音防火や環境保全効果、接する人にやすらぎを与える保健、休養効果、景観形成やシンボルとしてのランドマーク、主として道路植栽における交通安全機能、施設周辺や道路周辺、河川河岸等における日陰、緑陰の機能及び気候緩和効果、野生鳥類の誘致効果等数多くの効果が期待できる。

また、ヨシや一部の水湿性植物では土壌や水中の浄化をしたり、ヤブツバキ・ケヤキ等は大気汚染の指標の役割を果たすものもある。

一方植物には、農作物の病虫害に対する共通性や、中間寄主といった問題点をかかえているので、特に本県においては、ナシの赤星病の中間寄主である「シンパク類・・・カイズカイブキ、ハイビャクシン等」の植栽には注意を要する。

また、高木の列植等による日陰線が農地等に与える影響、落葉や枝葉の隣接地や敷地内の施設建物に与える影響、また、葉や果実による異臭やカブレ等の発生、チャドクガ、アメリカシロヒトリ等の害虫発生が人畜に与える被害、植物本体を口にすることによる人畜害（アセビ-家畜、キョウチクトウ-人畜、ヤマツツジ-家畜）等使用する場所によっては、その目的・効果を阻害する面があることを十分に考慮して計画をし、病虫害の防除等の維持管理を行う必要がある。

#### 5) 植物の生育条件

① 植物は、根・幹・枝・葉の4部分から成り、それぞれがその役割を果たして生育を続ける。

また、子孫を残すために花・果実を付ける。

これらの各部が観賞や各種機能の用を供せられる。

② 植物が生育するには、それぞれがその種別や生育の度合に応じて適当な水・空気（酸素・炭酸ガス）・養分・日照が必要である。

③ 植物の各部分は、良好な生育を続けるための環境要求があり、公共緑化事業においては、その要求のすべてを完全な状態で満足することは不可能ともいえるが、生育阻害要因を少しでも少なくしてやる必要がある。

#### ④ 各部の役割と阻害要因

上記③を各部毎に分解すると以下の通りである。

a) 根部・・・根は、ほとんどの植物が地中に存在して植物の姿勢を地中より保ち、地中の水分や養分を吸収し、地上部の生育を支えている。

#### ナツツバキ

ナツツバキは、真夏に近い6・7月のころが開花期で、ちょうど花の少ない万緑の山野に純白の花を咲かせて、ひときわすがすがしさをかもしだし、大山で花の咲く樹木として、貴重な存在である。国体の木。

そのためには、植物がそれぞれの種別や大きさに見合った根の生育に必要な土壌空間が必要であり、根の育成が可能な土壌を提供してやる必要がある。

その阻害要因としては、過度な水分の過不足、生育阻害物の混入、土壌酸度の不適、病虫害の被害等がある。

また、マメ科の植物やマツ等は固有の根粒菌との共生により、植物の生育や土壌中の養分の供給を行っているものもある。

- b) 幹部・・・幹部は地上において植物の姿勢を保ち、養分や水分の通り道となって枝葉の生育を支え、また枝葉で生成された物質を根部に送り、その生育をささえている。

生育阻害要因としては、病虫害の被害や人為的な損傷、主として移植時における過度の直射日光による日焼け等がある。

- c) 枝部・・・枝は、幹と葉の間を連結し、また、その機能も両者のものを合わせ持っており、また落葉期には冬期の植物の外観を形成する。

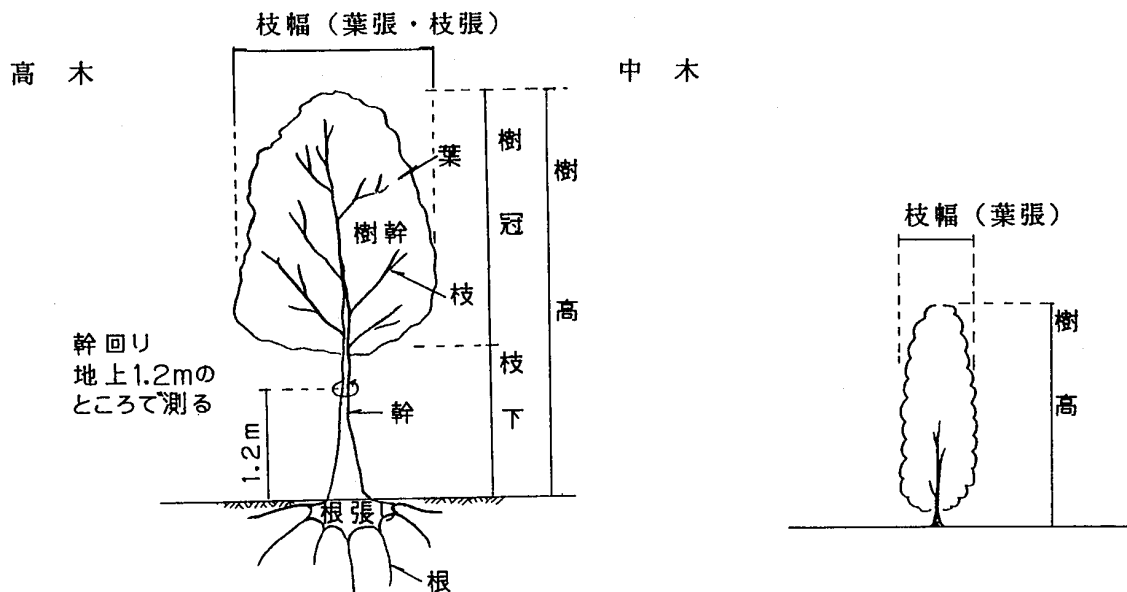
- d) 葉部・・・葉部は、植物の外観を形成し、葉緑素による光合成で大気中のCO<sub>2</sub>を取り込み、酸素を供給し大気の浄化をすると共に、養分を生成して植物の生育を支え、水分を発散し大気中の湿度を保ち、地下部の余分な水分を除去し、落葉となって地中に有機物を供給する。

また、新緑・紅葉等その色彩の変化で観賞効果を高める。

その生育阻害要因としては、日照の過不足、病虫害による被害、排気ガス等の汚染物害、潮風害等がある。

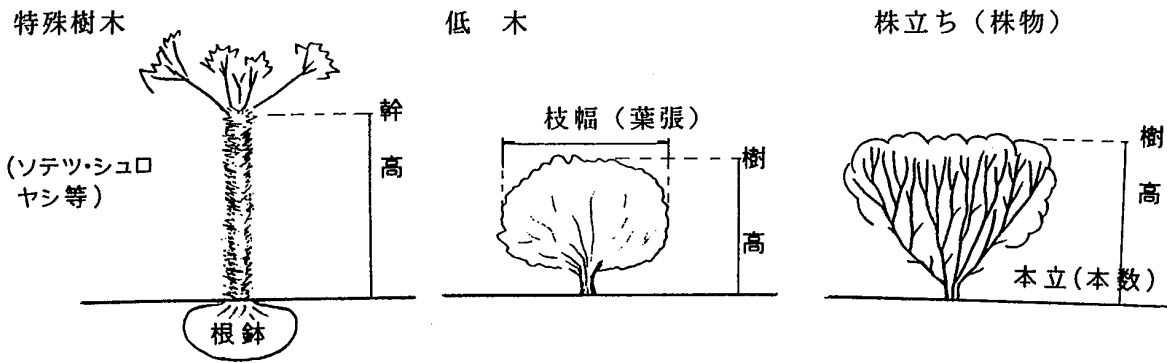
## 6) 樹木の性状

(図1-2)



### クルミ

大山では貴重な植生であるといわれる。ノグルミは、南大山のやや低い裾野地帯の二次林に混生するのがみられる。



① 高木と中木・低木

樹木は、標準的にはそれぞれの生長完成時の大きさでおおむね樹高 3 m 以上を高木、1 m 以上 3 m 未満を中木、1 m 未満を低木とする。

但し、施工時の大きさや管理による生長の抑制等で、高木や中木を中木・低木として用いることや、道路・港湾・工場等施設別の緑化基準で分類に差がある。

② 針葉樹と広葉樹

針葉樹は、裸子植物の中で球果をつけ葉が針状又は鱗状のものであり、ソテツやイチョウも含めて裸子植物全部を指すこともある。広葉樹は葉面が広く、網状に葉脈が走っており、一般にはっきりした花をつけ、被子植物と呼ばれる。

③ 落葉樹と常緑樹

秋に紅葉して、冬にはすべての葉を落とすものを落葉樹、一年中葉が見られるものを常緑樹と呼ぶ。なお、常緑樹には春先にほとんど全葉が替わるものと、年間を通じて徐々に新旧交替をはかるものがあり、落葉の発生時期や量の差がある。また、春先の新旧交替にあたり、落葉が早く新葉の展開までの間に落葉樹と同じ状態になるものを半落葉樹という場合もある。

④ 雌雄異株と同株

樹木には、一本の固体に雌花や雄花だけをつける雌雄異株と雌雄の花を一本の固体につける雌雄同株がある。

雌雄異株・・・イチョウ・クログネモチ・ヤマモモ・ポプラ・ヤマボウシ等

コブシ


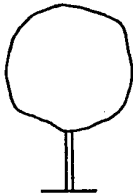

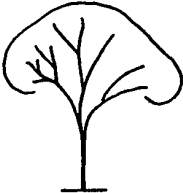



春四月の大山山麓は、スキーシーズンも終わり、残雪の散らばる落葉樹林に入ると、まだ樹々の芽はかたくとじ、あたりは静寂がただよっている。その林の中から、ぽっと明るく咲き出す花がある。これが、大山に春を告げるといわれているコブシの花である。  
佐治村の花。国体の木。

クログネモチのように、その実を観賞するものや野鳥を誘致する場合には雌木が使われるし、イチヨウ等で街路樹や公園の緑陰樹を計画する場合は、成熟した果実が悪臭をはなつため、雄木が使用される。

⑤ 樹形

樹木は樹種特有の樹形（基本樹形）を持っている。その樹形は、美観構成や各種機能の発揮に大きな影響を及ぼすため、樹種の選択においては常に樹形を考慮する必要がある。また、基本形にあわせて剪定等の管理を行うのが合理的である。




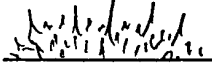
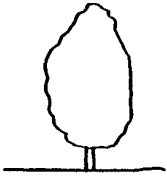
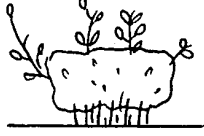
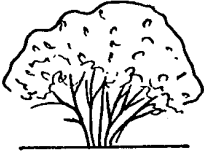
高木の樹形分類（表1-3）

卵形		プラタナス トウカエデ ニセアカシア ユリノキ	球形		エンジュ クス マテバシイ シイ
円錐形		イチヨウ メタセコイア アメリカフウ ヒマラヤシーダー コウヤマキ	盃形・扇形		ケヤキ アキニレ トチノキ
狭卵円形		ポプラ カイズカイブキ	下垂形		ヤナギ シダレザクラ シダレエンジュ
不定形		クスノキ タブ			

サクラ

4月中旬頃から、大山山麓ではつぎつぎに山のサクラが見ごろとなり、次第に中腹へと咲き登っていくのがみられる。それも一種類でなく、それぞれ特徴ある花模様を演出しながら、存分に大山の春を満悦させてくれる。

中・低木の樹形分類 (表1-4)

しだれ形		レンギョウ ハギ類 アベリア	球形		キョウチクトウ トウネズミモチ
株立形		アジサイ ヤツデ アオキ ヒイラギナンテン クチナシ ナンテン	匍匐状		ハイバクシン ツルマサキ
円筒形・長卵円形		サンゴジュ キンモクセイ モッコク ツバキ カナメモチ	刈込仕立て形		ハクチョウゲ ドウダンツツジ イヌツゲ ウバメガシ ナワシログミ ヒイラギモクセイ マメツゲ イブキ クサツゲ
盃状形		サツキ クルメツツジ キリシマツツジ マルバ シャリンバイ カンツバキ ヒメクチナシ オオムラサキ			

⑥ 深根性と浅根性

根の形態は大きく2つに分けられる。深根性のものは直根を有し、深く根が入り、浅根性のものは浅いところで横に広がっていく。

ミズキ

大木になるクマノミズキは、谷あいのいたるところでよく見られ、独特の階段状の樹冠の上に白花を散りばめる。その勇壮な景観は、梅雨の季節を象徴するもののひとつといえるであろう。

また栽培品や移植を行ったものでは、深根性のものでも直根がないものがある。深根性で直根が十分に生育出来ないものや浅根性で根の広がり悪いものは地上部の生育が劣り、風に弱く倒伏しやすい。

深根性樹木……クロマツ・イチョウ・イロハモミジ・クヌギ・コナラ  
シイノキ・プラタナス・マテバシイ等

浅根性樹木……ケヤキ・カイズカイブキ・トウカエデ・キンモクセイ  
モッコク・クロガネモチ・ナンキンハゼ等

※（図 2 - 2）を参照

#### ⑦ 陰性（陰樹）と陽性（陽樹）

陽光の十分当たるところでないと、良好な生育を示さないものを陽性（陽樹）といい、日陰でも生育できるものを陰性（陰樹）という。

陰樹……アオキ・アセビ・カクレミノ・ヒイラギナンテン・ヤツデ  
ヒイラギモクセイ・アジサイ・イヌマキ・サザンカ等

陽樹……クロマツ・アオギリ・ウメ・ケヤキ・スズカケノキ・センダン  
ニセアカシア・イチョウ等

但し、陰樹のほとんどのものは日当たりの良い場所での生育が可能であり、また常緑の照葉樹の一部のもの、例えば、ヤブツバキ・タブ・ヤマモモ等は、幼木の段階では陰樹であり、成木になると陽樹となるものがある。

一般に建物の密集した場所では、陽光が有効にとどかない場合が多いため陰性が好ましく、陽光の十分当たる場所では陽性が好ましいことになる。

#### ⑧ その他の性質

樹木は、耐寒性、耐塩性、耐乾性等や土壌成分、PH、土壌の粗密、湿潤度などにそれぞれ好みを持っており、気象に対しても生育温度を選ぶなど環境に対する適応性は樹種によってさまざまである。

※（表 7 - 1 - 1 ~ 5）等を参照

#### シ デ

全山の広い範囲に分布しているのはイヌシデで、次いでクマシデが多く、標高 300m以上のところでよくみられる。アカシデは弥山周辺ではほとんど自生がなく、東大山などの低山地帯の沢筋に分布域があるようだ。

## 7) 地 被

地被とは、平面的な広がりをもって、地表を被覆する植物をいう。地被植栽は、このような植物を用いて、地表を平面的に低く被覆するための植栽で、最も代表的なものは芝生である。

## 8) 草 花

木質組織の発達しないものをいう。

- ① 1年草 多年草、2年草に対して区別する語で、その年に種をまき、芽が出て花が咲き、実がなり、枯れておわるものをいう。
- ② 2年草 越年草ともいい、1年草、多年草に対して区別する語で、その年の秋に芽を出し冬を越して春に花が咲き、実がなり、枯れるまでに2年を要する植物をいう。
- ③ 多年草 樹木以外の植物で、地下の部分が2年以上生存しているもの。つまり冬になって、地上の部分が枯れても春になると芽を出す植物をいう。
  - a) 宿根性 冬になっても根が枯れないで、春になったら、また芽を出す植物をいう。
  - b) 球根性 球状（塊状）の茎や根をもった植物をいう。

## 9) 特殊樹木

ヤシ類、ソテツ類、ドラセナ類等をいうが、下記のその他を含めていう場合もある。

## 10) その他

- ① 竹 常緑多年生植物。横に走る地下茎から直立・中空で節のある地上茎が出る。葉は、細長い。
- ② 笹 丈の低い竹類の総称。
- ③ つる物 フジやツタ類の様につるとなって生育する植物をいい、その形質を利用して、パーゴラやスクリーン、地被として利用する。

### ミズメ

ミズメは落葉性の高木で、幼木は横縞のある桜膚をあらわすが、老木になるにしたがい暗灰色に変わり、りん片状の樺皮ができる。葉形もシラカバのように基部が張らず先がとがり、どちらかというときサクラの葉に似ている。

## 6. 樹木規格

### 1) 樹木の規格・寸法

#### ① 用語の定義

樹木の規格・寸法に関する用語の定義は以下とする。

樹形とは、樹木の特性、年数、手入れの状態によって生ずる幹と樹冠によって、構成される固有の形をいう。なお、自然に生育した場合の形を基本とするものを「自然樹形」、刈込みや枝づくりにより人工的に形をつくったものを「仕立物」という。

樹高とは、樹木の樹冠の頂端から根鉢の上端までの垂直高をいい、一部の突出した枝や軽弱な枝及び先端は含まれない。なお、ヤシ類など特殊樹にあって「幹高」と特記する場合は幹部の垂直高をいう。

幹周とは、樹木の幹の周長をいい、地際より1.2m上がりの位置を測定する。この部分に枝が分岐しているときは、その上部を測定する。幹が2本以上の樹木においては、おのおのの幹周の総和の70%をもって幹周とする。なお、「根元」と特記する場合は、地際の周長をいい、芝付ともいう。(例、ウメ等の仕立物の場合)

枝張(葉張)とは、樹木の四方面に伸長した枝(葉)の幅をいう。測定方向により幅に長短がある場合は、最長と最短の平均値とする。なお、一部の突出した枝は含まない。  
葉張とは、主として中・低木の場合についていう。

株立(物)とは、樹木の幹が原則として根元近くから分岐して、そう状を呈したものをいう。なお、株物とは低木でそう状を呈したものをいう。

枝下とは、樹冠を主に構成している枝のうち、最下枝から地表までの垂直距離をいう。

幹高とは、ソテツ・ヤシ類・ドラセナ類の葉の部分を除いた地表までの垂直距離をいう。

株立数とは、株立(物)の根元近くから分岐している幹(枝)の数をいう。

#### ニ レ

大山における分布をみると、ハルニレはミズナラ帯の600mから900mの適潤期にみられ、特に大山寺の南光河原両岸と博労座下の佐摩道路の周辺に、まとまってシデとの混成林ができています。



樹高と株立数の関係については、下記のように定める。

2本立……少なくとも1本は所要の樹高に達しており、他は所要の樹高の70%以上に達していること。双幹ともいう。

3本以上……過半数は所要の樹高に達しており、他は所要の樹高の70%以上に達していること。

単幹とは、幹が根元近くから分岐せず1本であるもの。

徒長とは、枝葉の伸長だけが盛んで、組織の充実が伴わない状態をいう。

根鉢とは、樹木の植付や移植に際し、掘り上げられる根系を含んだ土のまとまりをいう。

ふるい根とは、樹木の植付や移植に際し、土のまとまりをつけずに掘り上げること。ふるい掘り、素掘りともいう。(例：サクラ・イチョウ・ニセアカシア・プラタナス・ポプラ等の適性規格品で、適期の植付や移植の場合)

(図1-3)

徒長枝

徒長枝 含まない

含まない

枝張(葉張) (W)

幹周 (C)

樹高 (H)

枝下

胸高 1.2 m

根元周 (芝付)

平面図

立面図

特殊樹木・低木等については、(図1-2) 参照

#### ハンノキ

大山には、ハンノキ林は極めてまれのようなものである。しかし、かつて湿原のあったかん明間、榊水原、鏡ヶ成などには、一部にハンノキ林が出あうことがある。また大沢の池の周辺には、帯状に残された僅かなハンノキ林らしきものがある。

- 16 -